

## 『銀河鉄道の夜』におけるカムパネルラと保阪嘉内

大明 敦

### 〔抄 録〕

宮沢賢治の代表作の一つとされる『銀河鉄道の夜』の主要な登場人物であるカムパネルラについては、夭折した妹・トシや学生時代の親友・保阪嘉内などがモデルとして取り上げられてきた。本稿では、菅原千恵子・蒲生芳郎の両氏らによって提唱された保阪嘉内をモデルとする説への疑問について考察すると同時に、そこから『銀河鉄道の夜』の創作意図を考えてみようとするものである。『銀河鉄道の夜』は菅原氏がいうように「賢治が終生、嘉内に送り続けた

ラブコール」といった個人的な作品ではなく、ジョバンニのような境遇にある多くの読者に自らのメッセージを伝えるために書かれたものと考えられる。それは、『銀河鉄道の夜』が今なお多くの読者に親しまれている要因の一つなのではなかろうか。

キーワード 人物造形、保阪嘉内、犠牲死、理想、ほんたうのさいはひ

### はじめに

宮沢賢治の生涯には、劇的なエピソードが少なくない。また彼の作品の中には、その生き方を重ねて読んでみたくなるものもある。こうした特徴は、宮沢賢治が一般に広く読まれ、没後八〇年近く経った今日においても高い人気を維持している一因と思われる。未完でありながらも彼の代表作として取り上げられることの多い『銀河鉄道の夜』もまた、そ

うした作品の一つといえよう。

しかし、宮沢賢治の実生活における出来事を、そのまま作品に重ねて読むことは、適当なことであろうか。たとえば『銀河鉄道の夜』についても、その主人公であるジョバンニとカムパネルラを実在する人物に重ねて論じたものは少なくなく、いずれもジョバンニのモデルを宮沢賢治自身に求める点では共通しているものの、カムパネルラについては大正一一年一月に夭折した妹・宮沢トシ、盛岡高等農林学校時代の友人で

昭和八年七月に水死した河本義行、同じく盛岡高等農林学校時代の友人で大正一〇年七月に信仰をめぐる争論の末に訣別したとされる保阪嘉内らがモデルとして取り上げられてきた。創作の過程で作者が身近な人物（作者自身を含めて）をモデルとするのは特別なことではないが、文学作品におけるモデルとは伝記などは別として、あくまでも登場人物の造形や物語の素材として考えるべきであり、実在の人物と作品を必要以上に同一視した解釈は事実を歪め、作品の魅力を損なうことになる。

本稿は、こうした観点から『銀河鉄道の夜』におけるジョバンニとカムパネルラを宮沢賢治と保阪嘉内に重ねて論じた菅原千恵子・蒲生芳郎両氏らの説への疑問を呈しつつ、その検証を通じて『銀河鉄道の夜』の執筆の意図について論じようとするものである。

なお、本稿では賢治の姓を「宮沢」と表記するが、引用・参考文献の書名等については各々の表記のままとした。また、『銀河鉄道の夜』の本文については、第一―三次稿は『新校本宮澤賢治全集』第十巻における「『銀河鉄道の夜』初期形一―三」、第四次稿は同第十一巻における『銀河鉄道の夜』に拠った。

## 一 『銀河鉄道の夜』の誕生

『銀河鉄道の夜』の本文は、かつてはさまざまな段階で書かれたものが混在する状況でテキスト化されていた。それが『校本宮澤賢治全集』の編集に際して精査され、現存草稿は第一次稿から第四次稿までの四段階の本文形態に整理された。そのうち第一次稿から第三次稿までは初期形、第四次稿は後期形（または最終形）と呼ばれている。初期形では最

後にブルカニロ博士が登場し、ジョバンニが銀河鉄道の中で見聞きしたことは自分の実験であったことを告げる結末となるが、昭和六年ごろのものとは推定される大幅な手入れと加筆によって後期形ではブルカニロ博士の登場するシーンはすべて削除され、代わりに「午後の授業」「活版所」「家」の三章が冒頭に、ジョバンニがカムパネルラの水死を知るシーンが末尾に追加される。

『銀河鉄道の夜』の第一次稿は、大正一三年秋から暮頃に書かれたものと思われる。童話集『注文の多い料理店』の挿画を描いた菊池武雄氏の回想によれば、賢治が菊池武雄・藤原嘉藤治の両氏と『注文の多い料理店』の出版祝賀の宴を催した際、「オーバーのポケットから一握りの原稿」を出し、これは「銀河旅行」の話で「場所は南欧あたりにしてナス。だから子供の名などもカンパネルラ<sup>マ</sup>という風にしあんした」と語り、二人の求めに応じて草稿を読んで聴かせたという<sup>①</sup>。この話からは『銀河鉄道の夜』の構想において、まず「南欧あたり」という場所の設定があり、それに合わせて登場人物を「カンパネルラという風」な名前にしたということになる。作品中にキリスト教的な要素や題材が多く含まれているのは、農学校在職当時の賢治と親交のあった無教会主義のキリスト教徒・斎藤宗次郎の影響ではなからうか<sup>②</sup>。

賢治が「南欧あたり」を作品の舞台にした理由は定かではないが、天沢退二郎氏が指摘するようにデ・アミーチスの『クオレ』を意識した<sup>③</sup>ものかも知れない。さらにそこからイタリア人の名前として『太陽の都』の著者であるトマーズ・カムパネルラ（Tommaso Campanella）の名が浮かんだものかも知れない。さらにジョバンニの名の由来について、天

沢退二郎氏は新潮文庫『新編銀河鉄道の夜』の注五七で「このトマーゾの幼名がジョヴァンニ・ドメニコ (Giovanni Domenico) であったことも見逃しえない」とし、注五八で「トマーゾの幼名がジョヴァンニであることをもし賢治が知っていたとすれば、カムパネルラ＝ジョヴァンニのいわば隠れた双子性も注目されよう」とも記し、さらに『ひのきとひなげし』に「セントジョバンニ様」とあることから『銀河鉄道の夜』は「ある聖人（または宗教芸術家）の少年時代の物語」という「隠れた意味を持つことを暗示することく」であるとも述べている。

実在の人物の名を作品の登場人物に使うのは、ドイツの宗教学者パウ・ダールケの名に由来すると思われる『図書館幻想』の「ダルゲ」、歴史学者の白鳥庫吉の名をもじったと思われる『税務署長の冒険』の「シラトリキキチ」、花巻温泉の松雲閣支配人・菊池大三郎の名をもじった『一九三一年度極東ビザテリアン大会見聞録』の「福池第三郎」<sup>4</sup>など、賢治の作品にしばしば見られることであり、カムパネルラも『太陽の都』の著者の名に由来するとみてよさそうである。ただし、菅原千恵子氏のように「『ケンジ』の『ジ』がジョバンニの『カナイ』の『カ』がカムパネルラのもじった形ではないか」とまで見るのは疑問である。<sup>5</sup>

一方、「銀河旅行」という作品の着想には、吉田源治郎著の『肉眼に見える星の研究』（恒星閣、一九二二年）の影響が考えられる。賢治が同書を読んでいたことは草下英明氏によって早くから指摘されており、<sup>6</sup>草下氏の指摘した例の他にも『銀河鉄道の夜』には同書をヒントにしたと思われる点が多い。斎藤文一氏は『銀河鉄道の夜』に登場する星座について「なぜあそこだけが選ばれたのであろう」と疑問を呈しているが、<sup>7</sup>

これらの星々は『肉眼に見える星の研究』の主として「第六章 秋の星座と其伝説」から「第八章 南天の星座と其伝説」に記されている星座であり、こと座に始まりマジエラン星雲に終わる『銀河鉄道の夜』の「星めぐり」は、同書に想を得たもののように思われる。<sup>8</sup>

おそらくは、「銀河旅行」という構想の中に、「青森挽歌」などの詩に込められた妹・トシへの追慕をはじめ、農学校の教師としての体験、斎藤宗次郎など周囲の人物の影響、そして自らの心の中で醸成されてきた人生観や宗教観など、さまざまな思いが結実して『銀河鉄道の夜』の第一次稿が生まれたのではなからうか。中村稔氏は『永訣の朝』、『無声慟哭』を生んだ妹の死という事件の傷心は、ここまで尾をひいたであろうか」と述べているが、第一次稿の執筆が大正一三年であったとすれば、執筆の動機に「妹の死という事件の傷心」を考えてもおかしくない。<sup>10</sup>大正一三年はトシの三回忌の年で、賢治は同年七月・八月にトシを追慕した詩をいくつも作っており、とりわけ七月一七日の日付を持つ詩「薔露青」が『銀河鉄道の夜』と共通するモチーフを持つものであることからも十分考えられる。<sup>11</sup>

以後、昭和六年ごろと推定される第四次稿の成立に至るまで、度重なる手入れが続けられる。その過程で『手紙四』『ひかりの素足』『イギリス海岸』『双子の星』『学者アラムハラドの見た着物』など既存の作品のモチーフを取り込みつつ物語の深化が図られるが、第一次稿の執筆時期を大正一三年の秋から暮頃と考えるならば、『銀河鉄道の夜』もまた同年十二月一日付で刊行された童話集『注文の多い料理店』に収録された諸作品と同様の読者を想定し、その「序」に示されたものと共通する

意図を持って書かれた作品なのではなからうか。

## 二 カムパネルラ＝保阪嘉内説について

『銀河鉄道の夜』において、ジョバンニと共に銀河を旅するパートナーとして登場するカムパネルラのモデルを保阪嘉内に求める説は、菅原千恵子・蒲生芳郎の両氏による『銀河鉄道の夜』新見―宮澤賢治の青春の問題―（『文学』四〇巻八号、一九七二年八月）によって公に示されたものである。菅原・蒲生両氏はカムパネルラのモデルを妹のトシに求める「通説」を、トシの死だけをもって『銀河鉄道の夜』の発想を全面的に覆うことには無理」と批判し、当時盛岡高等農林学校の学生であった宮沢賢治と保阪嘉内の二人が大正六年に岩手山に登り、一緒に銀河を見ながら何かを誓った「銀河の思い出」こそが、『銀河鉄道の夜』の「原体験」であるという。さらに、保阪庸夫・小沢俊郎編の『宮澤賢治 友への手紙』（筑摩書房、一九六八年）に示された大正一〇年七月下旬に信仰上の考え方の相違から賢治と保阪嘉内が訣別したとする説を受け、「誓いを分かちあった友」との生別、「信仰を一つにする妹」との死別という「二重の喪失のなげきの告白」が『銀河鉄道の夜』であるとする。

この説は菅原氏の卒業論文「宮澤賢治の青春―作品に見る保阪嘉内の影響について―」に示された見解を元にしたもので、その後菅原氏の単著で刊行された『宮沢賢治の青春』（宝島社、一九九四年）はこの卒業論文を増補・改稿したものといえる。同書で菅原氏はトシをカムパネルラのモデルとする諸説を「その根拠となるものは死せる者との旅という

こと以外何もないのである」と一蹴し、「賢治と嘉内の出会いと訣別こそ彼の作品を凌ぐドラマ」であり、「賢治の想いはひたすら別れた友保阪嘉内に向けられていたといっても過言ではない」との見地から、「カムパネルラの犠牲死は保阪嘉内の理想を究極的な形で賢治流に扱ったもの」であり、『銀河鉄道の夜』こそは賢治が終生、嘉内に送り続けたラブコールであるとまで断じている。

カムパネルラのモデルを保阪嘉内に求める論としては、吉本隆明氏も大正一〇年七月下旬の宮沢賢治と保阪嘉内の関係に触れ、「作者のこの時期の像をジョバンニに重ねあわせたとき、その度合に応じて保阪の像を幻想の銀河鉄道の汽車のなかのカムパネルラに重ねあわせることができる」として、「寂しさかられて、激しく胸をたたいて叫び、咽喉いっぱいに泣くジョバンニの姿は、この親友保阪との齟齬の心意を写し出すものであった」と述べている<sup>12)</sup>。また、近年においても大澤信亮氏が新潮新人賞受賞作「宮澤賢治の暴力」（『新潮』一〇四巻一一号、二〇〇七年一月）の中で「菅原千恵子は『宮沢賢治の青春』で保阪が賢治の人生に決定的な影響を与えた事実を立証しているが、その白眉はやはり、『銀河鉄道の夜』の『カムパネルラ』のモデルが保阪だったことを明らかにしたことにある」と菅原氏の説を高く評価し、宮沢賢治と保阪嘉内の交友と訣別を描いた江宮隆之氏の小説『二人の銀河鉄道』（河出書房新社、二〇〇八年）も菅原氏の説を骨子としているように、菅原氏の見解や『宮沢賢治の青春』に描かれた「ドラマ」は、今以て多くの人々を惹きつけているように見える。

一方、『銀河鉄道の夜』新見―宮澤賢治の青春の問題―の発表後、



天沢退二郎氏によって反論「ジョバンニは何故オルフェか」「銀河鉄道の夜」新見」批判」(『賢治研究』二号、一九七二年十二月)が出されている。その中で天沢氏は、「実生活上の体験と作品世界内の問題とを、『原体験』という便利な概念を媒介として、無自覚に短絡させて省みない菅原・蒲生氏の浅慮」が同論文に引用された自説の誤読の原因となっていることを指摘し、「実生活上の事件や体験と作品行為とは、ぬきさしならぬ深い関係をもちながらも、本質的にはきびしく峻別さるべきものであるが、菅原・蒲生氏には、賢治作品の読解に際しても、私その他の賢治論の読解に際しても、あまりにもこの峻別意識が欠如」していることを批判している。ちなみに『宮沢賢治の青春』にはその批判が反映されていないばかりか、むしろ天沢氏が厳しく批判した「実生活上の体験と作品世界内の問題」の「短絡」は、さらに度を増しているようにさえ見える。

ジョバンニとカムパネルラが同性の級友という設定であるためか、菅原氏の説は尤もらしく見える。しかし、菅原氏がトシをモデルとした諸説の根拠を「死せる者との旅」ということに帰したのと同様な考え方をするなら、菅原氏の説の根拠もまた「二人の少年の旅」ということではない。ジョバンニとカムパネルラの人物造形は現実の賢治と保阪嘉内とはかけ離れたものであり、作品の世界と現実を重ね合わせて読むには無理がある。そもそも宮沢賢治と保阪嘉内の訣別自体が、小沢俊郎氏による伝記研究上の説の一つに過ぎない<sup>13)</sup>。宮沢賢治と保阪嘉内が訣別していないとすれば菅原氏の説も成り立たないが、それを別にしても、菅原氏のいうように「カムパネルラの犠牲死は保阪嘉内の理想を究極的な形

で賢治流に扱ったもの」で、『銀河鉄道の夜』こそは賢治が終生、嘉内に送り続けたラブコール」であるという考え方には、天沢氏が指摘した読解の問題はもとより伝記研究の点からも疑問を禁じえないのである。

### 三 カムパネルラの人物造形

カムパネルラについて論じるためには、まず作品においてカムパネルラがどのように描かれているかを把握しておく必要がある。ジョバンニと対比しつつ、この点について考えてみたい。

#### a 家庭環境について

カムパネルラの家族については、初期形では具体的な記述がないが、後期形では父親が「博士」であり、ジョバンニの父親とは幼い頃からの友人であったことが示されている。父親の長期不在と母親の病気のために貧窮しているジョバンニの家庭とは対照的に、カムパネルラの家庭は裕福である。たとえば第三次稿の「ケンタウル祭の夜」の章では、そうした裕福なカムパネルラの境遇に対する羨望や憧れが、何事にも秀でたカムパネルラ自身に対する羨望や憧れと共に次のように語られている。

カムパネルラなんか、ほんたうにいいなあ。今日だって、銀貨を二枚も、運動場で弾いたりしてゐた。ぼくはどうして、カムパネルラのやうに生まれなかったらう。カムパネルラなら、ステッドラーの色鉛筆でも何でも買へる。それにほんたうにカムパネルラはえらい。せいだって高いし、いつでもわらってゐる。一年生のころは、あんまりできなかったけれども、いまはもう一番で級長で、誰だって追

ひつきやしない。算術だって、むづかしい歩合算でも、ちょっと頭を曲げればすぐできる。絵なんかあんなにうまい。（中略）ぼくがカムパネルラと友だちだったら、どんなにいいだらう。カムパネルラは、決してひとの悪口を云はない。そして誰だって、カムパネルラをわるくおもってゐない。

この箇所は後期形では削除されるが、冒頭に追加された「午后の授業」や「家」の章で描かれたカムパネルラの家の様子から裕福な家庭であることは十分推察できる。初期形では家庭の裕福さを強調した表現がなされているが、後期形ではむしろ父親である「博士」のステータスを示すような表現に改められている。

カムパネルラの母親については、初期形・後期形ともにラストシーンにおいてカムパネルラが天上に母の姿を見つけることと、後期形では溺れたカムパネルラを搜索する場面に登場するのが父親だけであることなどから、既に死亡しているように思われる。しかし、初期形・後期形ともに「北十字とプリシオン海岸」の章でジョバンニが「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないぢやないの」と応じる場面があることから、天沢退二郎氏のように現実には母親は健在であってラストシーンで天上にあらわれた母親は前世の母とする見方もある<sup>14</sup>。

#### b ジョバンニとの関係について

『銀河鉄道の夜』を読む時、私たちは無意識にジョバンニとカムパネルラを親しい関係にあるように受け取りがちであるが、初期形においてはジョバンニとカムパネルラの間に交友といえるほどのものが存在して

いるようには思えない。たとえば第三次稿の「天気輪の柱」でジョバンニは次のように語っている。

ぼくはもう、遠くへ行ってしまうみたい、みんなからはなれて、どこまでもどこまでも行ってしまうみたい。それで、もしカムパネルラが、ぼくといっしょに来てくれたら、どんなにいいだらう。（中略）  
そしてぼくは、どんなに友だちがほしいだらう。ぼくはもう、カムパネルラが、ほんたうにぼくの友だちになって、決してうそをつかないなら、ぼくは命でもやってもいい。

二人が既に「友だち」であるなら、ジョバンニはこのような思いを抱きほくしはずである。初期形においてはジョバンニがカムパネルラに対して「友だち」になつてくれるなら「命でもやってもいい」ほどの憧れを一方的に抱いているだけである。併せて、何事にも秀でたカムパネルラの人物像やその裕福な境遇に対する羨望や憧れが語られていることは前項で引用した通りである。銀河鉄道の世界では想念がそのまま運動や物質として具現化されることを考えるならば、初期形において銀河鉄道にジョバンニとカムパネルラが乗り合わせたのは、ジョバンニのカムパネルラを求める想念がブルカニロ博士の実験の中で具現化されたもの<sup>15</sup>ともいえよう。

後期形になると、右に引用した部分は削除される。代わりに、「家」の章にあるジョバンニと母親との会話の中で父親どうしが「小さいときからのお友達」であったことや、そのためジョバンニも父親に連れられてカムパネルラの家に行ったり、学校の帰りに寄ったりしたことが「あのころはよかったなあ」というジョバンニの回想と共に記される。また、

過去に二人で一緒に銀河の写真が載った本を見たり、アルコールで走る汽車の模型で遊んだことがエピソードとして語られており、それらは二人が銀河鉄道に乗り合わせることに伏線になっている。

このように、後期形では二人の間に少なくとも単なる級友以上の交友があったことが示されるようになる。冒頭部分で先生の問いに対してカムパネルラが真つ先に手を挙げながらも、ジョバンニに遠慮して指さしても「もちもち立ち上がったまゝ」答えなかったのはそのためであろう。しかし、級友たちが「らっこの上着が来るよ」とジョバンニを冷やかすのを制止するわけではなく「気の毒さうに、だまって少しわらって、怒らないだらうかといふやうにジョバンニの方を見てゐるだけの態度には、「小さいとき」のような交友が途絶えて久しく（それがジョバンニの父親の不在期間の長さを示す）、カムパネルラにとってジョバンニとの交友は既に過去のことになってしまっているように感じられる。そのため、ジョバンニもカムパネルラに対して全面的な信頼感を抱いているわけではない。「ジョバンニの切符」の章において途中から乗ってきた女の子とカムパネルラが仲良く話を始めたことでジョバンニが機嫌を損ねるのも、二人の関係が親友のように強く安定したものではないことを示しているのではなからうか。

### c カムパネルラの切符について

ジョバンニの持っている切符は「四つに折ったはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙」で、「いちめんの黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの」であった。鳥捕りはそれを「ほんたう

の天上さへ行ける切符」で「どこでも勝手にあるける通行券」であるという。<sup>18)</sup>この切符は、第二次稿ではジョバンニとカムパネルラの二人の分であった。もしそうであるなら、この切符を使って二人はどこまでも一緒に行くことが可能である。

しかし、第三次稿ではその「緑いろの紙」はジョバンニ自身の切符に変えられ、カムパネルラは別に「ちいさな鼠いろの切符」を持つことになる。この設定は後期形にも引き継がれており、検札の際にジョバンニが「困って、もちもちして」いるのと対照的に、カムパネルラは「わけもないという風」に自分の切符を差し出す。その行為から、自分の切符を持ったカムパネルラは、そこに示された行き先を既に知っているように思われる。カムパネルラに彼自身のための行き先が与えられている以上、「どこでも勝手にあるける」ジョバンニとどこまでも一緒に行くことは、当然ながら最初から不可能なことになる。

このように考えるなら、天上に母の姿を見たカムパネルラがジョバンニの前から突然姿を消したのは、自らの行くべき所に行っただけであり、想念がそのまま運動になる銀河鉄道の世界では、鳥捕りが「来ようとしたから来たんです」と言っているように駅でなくとも列車に乗り降りが可能なのである。カムパネルラがジョバンニの前から姿を消す場面を宮沢賢治と保阪嘉内の「訣別」と重ね合わせる菅原千恵子氏や吉本隆明氏のような捉え方は、適当とは思われない。

なお、ジョバンニの切符が「どこでも勝手にあるける通行券」であるという意味の一つは、それが銀河鉄道の「幻想第四次」の世界と現実の世界を往き来できることであろう。第二次稿でジョバンニが車内で父母

のことを思い出して「僕は帰らなけあいけない」と「すっかりふさぎ込んでしま」った時、「セロのやうな声」が「まあ安心しておいで。いつでもその切符で帰れるから」という件がある。この部分は第三次稿で削除されるが、留意しておくべきであろう。また、ジョバンニは南十字星が近づいて列車から降りる仕度を始めた女の子たちに、「僕たちと一緒に乗って行かう。僕たちどこまでだって行ける切符持つてるんだ」と言う。この部分は後期形にも引き継がれるが、ここで「僕たち」というジョバンニの言葉は、当初はこの切符がジョバンニとカムパネルラの二人の分であったことの名残であるのかも知れない。

#### d カムパネルラの死について

第二次稿まではカムパネルラの死については、少なくとも現存部分を見る限りは触れられていない。カムパネルラが姿を消した直後のジョバンニも「窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって」、「さあ、やっぱ僕はたったひとりだ。きつともう行くぞ。ほんたうの幸福が何だかきつとさがしあてるぞ」と叫び、明るく力強いラストシーンを描いている。

ところが、第三次稿になるとこの部分は「窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣き出し」、「もうそこらが一ぺんにまっくらになったやう」に思うように書き換えられ、カムパネルラが座っていた席に「青白い顔の痩せた大人」が現れて「あのひとはね、ほんたうにこんや遠くへ行ったのだ」と告げることで、カムパネルラの死がぼんやりと示される。しかし、まだカムパ

ネルラの死因は示されていない。この稿まではジョバンニが銀河鉄道の中で経験したことはブルカニロ博士による実験という設定になっているため、ストーリー上はカムパネルラの死に重要性はなかったのかも知れない。いずれにせよ、初期形においてはカムパネルラの犠牲死という設定はないのである。

後期形に至ると、この「青白い顔の痩せた大人」のシーンは削除され、夢から醒めたジョバンニが街に戻ったところで、川に落ちたザネリを救おうとしてカムパネルラが川に飛び込み、ザネリを助けた後カムパネルラの姿が見えなくなったことをマルソから聞かされる。そのため、銀河鉄道の世界は単なる夢の中の出来事ではなく現実と夢とが絡み合ったものになり、内容に重みが増しているように見える。原稿第七八葉に記されたメモに「カムパネルラをぼんやり出すこと、／カムパネルラの死に遭ふこと、／カムパネルラ、ザネリを救はんとして／溺る。」とあるのはこうした改稿の構想を示すものであろう。

このように、後期形ではカムパネルラの死が明確に示されることになるが、問題はこの死をどう考えるかである。本文に即して考える限り、カムパネルラは自らザネリを救うために命を捨てることを選んで川に飛び込んだわけではない。ザネリが川に落ちたのを見て無意識的に体が反応したといってもよく、飛び込んだらどうなると考える暇などなかったのである。結果としてカムパネルラは命を落とすことになったが、運が良ければ助かっていたかも知れない。すなわち、カムパネルラの死は意識的なものではなく、結果的なものと見るべきではなからうか。そう考えれば、カムパネルラの死には他人のために命を犠牲にしたことより



も、まさに「ジブンヲカンジョウニ入レズ」に人のために行動を起こしたということに意味があるように思われる。

蠅の火の話や、船の遭難によって命を落とした三人の話にも見られるように、<sup>18</sup>『死』は『銀河鉄道の夜』の重要なモチーフになっている。そして、もう一つのモチーフとして、母への回帰<sup>19</sup>があり、最終形におけるカムパネルラの死はこの両者が結びついたものとなっている。菅原千恵子氏は銀河鉄道の車内で「突然、『おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか』というカムパネルラの発言に出くわす」ことが「余りにも唐突であり（中略）読者は、なぜ『おっかさん』の問題がここに突然挿入されているのか、理解に苦しむにちがいない。あたかも読者を見捨て、ジョバンニとカムパネルラだけが『おっかさん』の問題を知っているといわんばかりである」と述べ、それは大正七年六月の保阪嘉内の母の逝去を機に「母親の幸福については、賢治と嘉内の間でよくとりあげられた共通の問題であった」からであるという。しかし、この「発言」はそのような個人的な問題に帰するものではなく、母から授かった命を他人のために捨てしまったことを母親がどう思うかを案じたものと受け取るのが自然ではないか。

#### e カムパネルラとジョバンニの対比

初期形・後期形とも、カムパネルラはジョバンニと対照的な人物として描かれている。カムパネルラとジョバンニは家庭環境としては裕福と貧困という明暗が際だっており、ジョバンニは家計を助けるために早朝には新聞配達、放課後には印刷所で活字拾いのアルバイトをしなければ

ならず、勉強をする時間も級友たちと遊ぶ余裕もない。そうした家庭環境を反映して、カムパネルラは先生の質問にも真つ先に手を挙げるような優等生で級友たちの人望を集めている人物、逆にカムパネルラは日々の労働に疲れ級友たちからも疎外された孤独な人物として描かれている。初期形ではカムパネルラが銀貨を玩具にして遊ぶようなふるまいを描くなどカムパネルラの裕福さが強調されているが、後期形では貧富の差よりも人間関係に重きが置かれ、ジョバンニの孤独が強調されるような描写がなされている。

こうした対照的な人物造形は、両者のキャラクターの違いを鮮明にし、カムパネルラをジョバンニの憧れの対象とすべく意図的になされたものといえる。すなわち、『銀河鉄道の夜』の本文から読み取れるカムパネルラの人物像はジョバンニの持っていないものを資質的にも家庭環境的にも持っており、初期形においてはジョバンニにとってカムパネルラは「友だち」ではなく一方的な憧憬の対象である。そういう意味では当初カムパネルラは通俗的な幸福の象徴として造形された人物であったのかも知れない。

銀河鉄道の車内では、二人は共に旅をすることになる。しかし、「ほんたうのさいはひ」を求めて「どこまでもどこまでも一緒に行かう」というジョバンニに対して、カムパネルラは消極的である。このことも対照的に感じられる。とりわけ第三次稿以降、カムパネルラとジョバンニは別々の切符を持つことになり、定められた行先を持った者どどこにも行ける者という対比、さらに露骨な言い方をすれば死者と生者という明確な対比がなされている。

こうしたことから考えるならば、カムパネルラを賢治が作品中に登場させた意図は、ジョバンニとカムパネルラを対比させ、その対比を通じてジョバンニの人物像をより明瞭にし、賢治がこの作品に込めた思いを読者に伝えるべくジョバンニを誘導するためではなかったかと思われる。母親思いで働き者ではあるかも知れないが、これといった取り柄も特筆すべき活躍もなく、劣等感や孤独感に苛まれ、性格も子供っぽいジョバンニは、彼一人だけでは長編童話の主人公としてはあまりにも魅力に乏しく役不足の観がある。それを人の心を打つ作品の主人公たらしめているのは、常に並行してカムパネルラが存在があるからではなからうか。そこに賢治の意図が感じられはしないか。それゆえ、ジョバンニもカムパネルラも、『銀河鉄道の夜』に込められた賢治のメッセージを読者に伝えるために、賢治自身によって造形され、さらに度重なる手入れによって磨き込まれていったキャラクターにはかならないと考えたいのである。

#### 四 保阪嘉内の理想と死生観

ここで、一旦『銀河鉄道の夜』という作品から離れ、保阪嘉内という人物に目を転じてみたい。保阪嘉内の人物像については、決して広く知られているとは言い難いが、御子息の保阪庸夫氏による「保阪嘉内の生涯」が『宮澤賢治 友への手紙』に収録されており、それが基本的な資料になっている。菅原千恵子氏の説も同書を下敷きにしたものである。

同書から読み取れる保阪嘉内の思想の根幹は、自然への憧憬、芸術（文芸を含む）への関心、農村改良への志向の三点に集約できよう。こ

れらは、後述するように彼が少年時から抱いてきた死生観や「藤井平」と呼ばれる穀倉地帯の地主で先祖代々学問や文芸に関心を持つ者の多かった家庭環境などを背景に、甲府中学で校長の大島正健の薫陶を受けたりトルストイの思想などに感銘を受けながら形を成していったものと思われる。保阪家に残されている彼の中学生時代の作文や弁論の原稿の中に、そうした理想は「花園農村」「美的百姓」「田園都市」といった言葉をキーワードとして表現されている。そのうち、「美的百姓」は徳富健次郎の『みづのたはこと』（新橋堂書店、一九一三年）、「田園都市」は天野藤男の『田園趣味』（洛陽堂、一九一四年）に拠ったものである。また、「花園農村」については、彼の農村観を最もよく表現した語として紹介されることが多く、その具体的なイメージとして中学時代に書いた『若葉の朝：我理想の村：』という作品の次の一説がしばしば引用されてきた。

春雄はこの村の外観が大いに立派である事を<sup>サト</sup>眺めた。叔母からも村の内治なる事を話された。向きなを<sup>サト</sup>つて見ると向ふの山に病院の棟が緑の間に見えた。それから少し東寄りの低い所に時計台が見えた。その後には公会堂が見えた。「今日は日曜ですから別に鐘は撞きませんがいづもなら必度<sup>キツ</sup>朝野良へ出る時と昼上りの時と晩と此三度は鐘で時刻を報知するのですからもう整然<sup>ちゃん</sup>としたもので昔のやうに<sup>マコ</sup>名々勝手に仕事を始めて勝手な時に終るなどと云ふ不揃ひな事はありませんよ。それからあの大きな時計台で時計のない家でも時間がちゃんとわかるのです」と叔母が語った。「成る程随分大きな時計ですね」「そうですね、そして公会堂には料理番が住んで居て大概の

者なら何でも好きな料理が出来ますから家で面倒なら公会堂へ行けば安価で甘い料理が食べられるのです。又大勢の人の寄り合ひなどもやれ、ば附属図書館覧所では新聞や雑誌も見られ活動写真芝居奇術講談などをする所もあり玉突湯殿其他小さな室が沢山ありますから必要な時には家でなくて公会堂へ行くのです。又庭は運動場になつて居て日曜などには小供や若い人達が楽しうに遊んでゐるのが見られます」と叔母は能弁に説き立てた。春雄は一々頷いて村長稲野氏の功績の大なるのを曉つた。

従来それは、トルストイや徳富健次郎などの影響を受けつつ、彼自身が農村への憧憬の中で発案したものと考えられてきた。しかし、これは明らかに農学者・横井時敬の小説『模範町村』（読売新聞社、一九〇七年）を写したものである。横井は地方改良運動の中で提唱されてきた官製の模範村の構想に疑問を抱いて自らの模範村論を展開するが、その中に「花園道路」という語がキーワードとして登場する。嘉内の「花園農村」はおそらくこの語をヒントにしたものであろう。『模範町村』はそうした横井自身の模範村のイメージを具体的に描いたものであり、嘉内はそこに自分の理想を見出したのであろう。

こうした保阪嘉内の農村観については、さらに検討を進めて横井ら先駆者の考えに影響を受けた部分とオリジナルな発想とを明確に分ける必要があるが、中学時代にはこうした理想を抱き、将来は農学を学んで自ら村長として故郷をこのような模範村にして美田で埋め尽くしたいと志すようになっていた。盛岡高等農林学校に進学したのもそうした理想を実現させるためであり、在学中には賢治に「花園農村」への想いを熱く

語ったことであろう。その後、大正七年三月に志半ばで学校から除名処分を受け、故郷で営農を実践する中でも挫折を経験し、保阪嘉内の考えは一層現実的なものへと変化していき、晩年は青年教育や農村副業の研究に力を注ぐが、胃癌のため昭和一二年二月に没する。ただし、死の前月に嘉内を見舞った知友に「思えば俺の一生は、農学を学ばんとして成らず、農村伝習所を興さんとして成らず、農村工場を建てようとして成らず、失敗の連続であつた。若し此の病を克服出来れば再度上京して研究を完成し、農村復興の資金を作る。その時にはお互に頑張ろうではないか。」と語ったところから、農村改良への思いは最期の時まで持ち続けていたことがうかがえる。

また保阪嘉内は、既に小学生の頃には度々村を襲った洪水で「水に流された墓地の有様を見て、人は死後地獄へも極楽へも行くものではない。唯自然に還り土に化してゆくのだ、と了解し」、中学時代には若い叔父や友人たちの夭死から「人は美しい自然から生れて懐かしい自然に帰る。自然に最も近い者は土に親しむ百姓である。故に百姓の生活はそれに似つかわしく楽しく、美しいものでなければならぬ。又、自然に従って生死するのが人間の定めであるから、なすべき事を果して一刻も早く自然に還る事、即ち早生（早世）こそ自然の寵児にふさわしい」という死生観を持っていたという。死に瀕しても、周囲の近親者が号泣する中で「何を泣いているんだ。人は皆、こうして自然に還ってゆくのだ」と言い遣して永眠したことを考えると、晩年に至るまで嘉内の死生観に大きな変化はなかったものと思われる。

果たして、こうした保阪嘉内の生き方が、菅原千恵子氏のいうように

「カムパネルラの犠牲死は保阪嘉内の理想を究極的な形で賢治流に扱ったもの」といえるであろうか。保阪嘉内の理想は自然に従って成すべきことをして再び自然に還っていくことであり、自然に最も近い農民に尊さを見出して愛すべき郷里の村の改良を志したのであり、他人の為に命を捨てることでも天上に自分の行き場所を見出すものでも決してない。運命に従って行くべきところへと旅するカムパネルラの姿勢と、何度挫折を経験しても自らの信念に従って一貫して農村改革を指向しつつ生涯を終えた保阪嘉内の姿勢とは重なるものとは思えない。『銀河鉄道の夜』の中で、強いて嘉内の理想に最も近いものを挙げるとすれば、それはカムパネルラではなくむしろジョバンニの言葉の中にある「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもっといいところをこさえないけないうって僕の先生が云つたよ」という部分のよう<sup>(25)</sup>に感じられる。

## 五 『銀河鉄道の夜』執筆の意図

以上、『銀河鉄道の夜』におけるカムパネルラの人物像と保阪嘉内について考えてきた。ここで、カムパネルラを保阪嘉内に重ねて見る菅原千恵子・蒲生芳郎両氏の説に立ち返って考えてみるなら、結果としてカムパネルラを保阪嘉内に重ね合わせて読むことには問題があると言わざるを得ない。そもそも天沢退二郎氏が「ジョバンニはあくまでジョバンニ、カムパネルラはあくまでカムパネルラであり、物語世界を现实生活へ還元して解釈すべきではない」と述べている<sup>(26)</sup>のとおり作家論的な読み自体に問題があることは言うまでもないが、ここで問題にしたいのは宮沢

賢治にとって『銀河鉄道の夜』は、菅原氏が言うように「賢治が終生、嘉内に送り続けたラブコール」といった個人的な書簡のような作品ではないということである。

もちろん、作家が創作を進める上で身近なところにモデルや題材を求め、それを素材として作品の中に組み込むことは珍しくはない。また、賢治の作品の中には保阪嘉内につながると思われるものがある。たとえば『風野又三郎』に登場する又三郎の風貌は、大正五年に賢治たちが自啓寮の中で上演した劇『人間のもだえ』で保阪嘉内の演じた「全能の神アグニ」の風貌によく似ている<sup>(26)</sup>し、又三郎がサイクルホールをする話の中で保阪嘉内から聞いたと思われる八ヶ岳や富士川など甲州の自然が描かれている。おそらくは八ヶ岳山麓の地域にある「風の三郎」という風の神の信仰も、賢治は保阪嘉内から聞かされていたことであろう<sup>(27)</sup>。また賢治はこの作品で「どう」という風の擬音を使っているが、保阪嘉内は既にこの擬音を短歌の中で使っている<sup>(28)</sup>。こうした文学的な次元での保阪嘉内との関連を考えることはできるが、だからといって作品中の又三郎と実在する保阪嘉内がイコールではないことは言うまでもない。仮に保阪嘉内を人物造形の上でモデルにしたとしても、又三郎はあくまでも又三郎である。同様に、保阪嘉内に通じる事柄が『銀河鉄道の夜』に物語や人物造形の素材として織り込まれていたとしても、カムパネルラと保阪嘉内はイコールにはなり得ない。

既に述べたように賢治は『肉眼に見える星の研究』に触発され、同書を典拠にしつつ「銀河旅行」の物語を構想していったと思われる。モチーフとしては大正一三年七月一七日の日付を持つ詩「薔露青」にその



萌芽が感じられるが、そこに鉄道を走らせるという発想を得て「銀河旅行」のストーリーとし、既存の作品を取り込みつつ『銀河鉄道の夜』の第一次稿が誕生したものと推測される。作品執筆の動機になったと思われるトシを失った哀しみや追慕の念は、ここに至って作品として昇華しているように見える。そういう意味では、『銀河鉄道の夜』という作品を書くことで、賢治はトシの死という哀しみを克服したのではなかったか。

ここで強いて『銀河鉄道の夜』の中に保阪嘉内の影響を考えるとすれば、「銀河旅行」の乗り物に鉄道を使うという発想にあるように思われる。保阪嘉内は中学時代である一九一〇年に接近したハレー彗星をスケッチし、そこに「銀漢ヲ行ク彗星ハ／夜行列車ノ様ニニテ／遙カ虚空ニ消エニケリ」と書きつけている。保阪嘉内が賢治にこの話をしていたとすれば、「銀河旅行」という着想を得た際にこの言葉を思い浮かべた可能性はある。二人で岩手山に登って銀河を眺めながら何かを誓い合った思い出や、盛岡高等農林学校での学生生活や、信仰をめぐっての幾度かの争論などが作品の構想や執筆の際に脳裏に蘇った可能性を否定はしないが、それらを以てこの作品すべてを解釈しようというのは当然無理な話である。それらは『銀河鉄道の夜』を構成する要素の一部ではあっても、全体に及ぶものではない。

では、賢治は誰のために、あるいは何のために『銀河鉄道の夜』を書いたのであろうか。それはおそらくはジョバンニのような貧しく不遇な多くの少年たちのため、彼らの心の糧としてではなかったか。菅原氏は『銀河鉄道の夜』は初めから多くの読者にわかってもらおうとして書いたものではなかった。賢治の想いはひたすら別れた友保阪嘉内に向けら

れていたといっても過言ではない。「銀河」や「ひとびとのさいはひ」や『ほんたうの神さま』や『赤い電信はしら』や『天の川の孔』などは賢治と嘉内の間にしか通じない暗号のようなことばであった。だから私たちにとっては難解といわれる『春と修羅』も『銀河鉄道の夜』も保阪嘉内が一読すれば賢治の痛切な思いが『打てば響く』ように伝わって来たはずである」ともいう。<sup>31</sup>そして、そのことを作品の読み手に保阪嘉内ただ一人を想定する根拠の一つとしているが、賢治が一般の少年を対象とした物語として『銀河鉄道の夜』を書いたことは、菊池武雄氏の証言に賢治が「今こんなのも書きかけてるがどういうもんでしよう。子供等にはわかるようだが」と言ったことや、『歌稿B』表紙に「少年小説」として「ポラーノの広場／風野又三郎／銀河ステーション／グスコープドリの伝記」と列記していることなどからも十分に推察できる。

また、童話集『注文の多い料理店』の「序」にも見られるように、賢治は「ひどいぼろぼろのきもの」であっても価値観や心の在り方が変わるることによって「いちばんすばらしいびらうどや羅紗や、宝石いりのきもの」に変わって見えるという考えを持っており、そうした観点から書かれた「ちいさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべもの」になることを願っている。「幻想第四次」の世界では想念が運動や物質として具現化されることを描いてみせた『銀河鉄道の夜』もまた、読者の「すきとほったほんたうのたべもの」になることを願って書かれたものであるはずである。第三次稿のラストシーンにおけるブルカニロ博士の「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本統の世界の火やばげしい波の中を大

股にまっすぐ歩いていかなければいけない」という言葉は、賢治が農学校の生徒をはじめ厳しい現実を生きる少年たちに向けて発したメッセージであったように思われる。厳しい現実を乗り切るための心の持ち方と伝えると同時に、そのエネルギーとなる「すきとほったほんたうのたべもの」として賢治はこれらの童話を書いたのではなかったか。

これらのことから考えるならば、農学校の教師として農村の厳しい現実を目の当たりにし、ジョバンニのように勉強よりも労働に精出さなければならぬ多くの少年たちを見てきた賢治は、『銀河鉄道の夜』を通じてそうした少年たちが生きていく希望や目標として「ほんたうのさいはひ」を探すことを提示しようとしたのではなかったか。『銀河鉄道の夜』の中で、「けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう」というジョバンニの問いに、カムパネルラは「僕わからない」と応じている。この問答は、「ほんたうのさいはひ」とはたった一つの何かに限定されたものではなく、何が「ほんたうのさいはひ」であるのかは人それぞれに異なっていること、すなわちジョバンニにはジョバンニの、カムパネルラにはカムパネルラの「ほんたうのさいはひ」があることを示しているのではない。ジョバンニと家庭教師の青年とのいわゆる「神さま論争」はその伏線のようにも読める。

もしそうであるなら、ジョバンニとカムパネルラがそれぞれに思う「ほんたうのさいはひ」は必ずしも同じである必要はないはずである。カムパネルラの死も、船と運命を共にすることを選んだ三人の死も、世間的に考えれば不幸な出来事かも知れないが、それらの行為は賢治の考える「ほんたうのさいはひ」に通じる生き方の例を示したもののよう

も受け取れる。犠牲死はもちろん尊いものであるが、それはあくまでも結果であって、大切なものはそこに至った生き方や価値観であると、賢治は教えたかったのではなかったか。現実ではたとえ貧しく孤独で、何の取り柄もなく劣等感に苛まれるような状況に置かれていても、「ほんたうのさいはひ」を探して生きること意義がある、あるいはそうした生き方こそが「さいはひ」の一つの形であることや「さいはひ」につながることを『銀河鉄道の夜』によって遍く読者に伝えようとしたものと見たいのである。

銀河鉄道の旅を終えたジョバンニから劣等感は消え去ったはずであり、そう考えるなら『銀河鉄道の夜』はジョバンニの象徴としての「死と再生」を描いたものとも読める。ブルカニロ博士が銀河鉄道の中での出来事は自分の実験であったことを告げる初期形から、ジョバンニが自分自身で「ほんたうのさいはひ」を見つける生き方を決意する後期形への改稿もそうした意図によると考えたい。<sup>34</sup>

### おわりに

宮沢賢治という作者自身がさまざまな観点から論じられているように、その代表作の一つである『銀河鉄道の夜』もまたさまざまな観点から論じられている。ここでは、その登場人物であるカムパネルラのモデルに関する菅原千恵子・蒲生芳郎両氏の説、とりわけ菅原千恵子氏の単著『宮沢賢治の青春』の最終章「『銀河鉄道の夜』は誰のために書かれたか」に述べられたカムパネルラを保阪嘉内と重ね合わせて『銀河鉄道の夜』を「保阪嘉内へのラブコール」とする見解に対し、批判を行いつ

つ論じてみた。結論としては、『銀河鉄道の夜』は、特定の個人に捧げるようなプライベートな作品ではなく、カムパネルラもジョバンニも賢治が自身のメッセージを伝えるために造形した架空の人物と見るべきである。それを保阪嘉内であれ、トシであれ強引に特定の人物に重ねて解釈すれば、無理が生じるのは当然のことである。

もちろん宮沢賢治の保阪嘉内宛書簡からも読み取れるように、宮沢賢治における保阪嘉内の影響は決して小さくはないと思うことは私も同感である。しかし、保阪嘉内の人物像やその思想についてはまだまだ研究途上と言わざるを得ない。『宮澤賢治 友への手紙』などの文献で知りうるのはその一端に過ぎず、今後さらなる現存資料の整理と研究が必要であろう。とりわけ、彼の農村改良の考え方に対する明治・大正期の農業経営論の観点からの検討は十分ではなく、宮沢賢治と保阪嘉内との関係についても、大正一〇年七月の二人の訣別のよう定説化している事柄にも再検討を要するものがある。

近年、宮沢賢治に影響を与えた人物として保阪嘉内が取り上げられる機会が増え、それとともに菅原千恵子氏の『宮沢賢治の青春』にも再び光が当たりつつあるように見える。しかし、右に述べたような伝記研究上の問題や、天沢退二郎氏が既に指摘した「物語世界を実生活へ還元して解釈すべきではない」といった点<sup>35</sup>には十分な配慮が望まれる。そうでなければ、かつて伝説化した宮沢賢治像が作られていったように伝説化した保阪嘉内像が作り出され、宮沢賢治と保阪嘉内の関係もまたあらぬ方向で解釈される危惧が感じられてならない。<sup>36</sup>

## 〔注〕

- (1) 菊池武雄『注文の多い料理店』出版の頃『宮澤賢治研究』筑摩書房、一九五八年。
- (2) 斎藤宗次郎(栗原敦・山折哲雄編)『二荊自叙伝』(上・下)岩波書店、二〇〇五年。同書の記述から斎藤と賢治の親交の様子や、斎藤も星空の観察に関心があったことがわかる。
- (3) 天沢退二郎『クオレ』の影響『別冊太陽』五〇号、一九八五年六月。
- (4) 岡村民夫『イーハトーブ温泉学』みすず書房、二〇〇八年。二六〇頁「菅原千恵子「宮澤賢治の青春」作品に見る保阪嘉内の影響について」『宮城学院女子大学日本文学ノート』七号、一九七二年二月。
- (5) 草下英明『賢治の読んだ天文書』『四次元』三〇号、一九五二年七月。
- (6) 『宮澤賢治と星』(学芸書林、一九七五年)に再録。
- (7) 斎藤文一「銀河鉄道はどこを走るか——十字架から十字架へ」『別冊太陽』五〇号、一九八五年六月。
- (8) 一例を挙げるなら『肉眼に見える星の研究』第六章ではまず「秋夜の盛粧」として「乳の路」について記し、「我々に南天を仰ぐ機会が与えられるならば、天の河の流れを更に南下して行くがい。そして、有名な南天の南十字架星にまで流れを下れば、所謂「石炭袋」の異観に接することが出来ませう」と記している。もちろん、賢治の読んだ天文書は同書以外にも多くあったと思われるが、これが「銀河旅行」の着想を導いたのではないかと思われる。
- (9) 中村稔『宮沢賢治』筑摩書房、一九七二年。
- (10) 天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ 増補改訂版』筑摩書房、一九七七年。
- (11) 天沢退二郎『薙露青』解説『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社、一九七九年。
- (12) 吉本隆明「ジョバンニの父とはなにか」『梅光女学院大学公開講座論集』一九七三年六月。
- (13) この点については、拙稿「宮沢賢治と保阪嘉内の『訣別』をめぐる」『宮沢賢治研究 Annual』二〇号(二〇一〇年九月)に詳しく述べた。
- (14) 入沢康夫・天沢退二郎『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社、

- 一九七九年。三四―三五、四九―五〇、一四八―一五一頁。
- (15) この点については既に桑原啓善「異次元世界を描写してみた『銀河鉄道の夜』」『宮沢賢治』第七号（一九八七年一月）に指摘がある。『宮沢賢治の霊の世界』（でくのぼう出版、二〇〇一年）に再録。後期形ではジョバンニ自身が「銀河ステーション」の章で「さうだ、ぼくたちはいま、いっしょにさそって出掛けたのだ」と考えていることが示されている。
- (16) 大山尚「『銀河鉄道の夜』論——「らっこの上着が来るよ」をめぐるの一考察——」『賢治研究』六五号（一九九四年二月）では、ジョバンニがこのように冷やかされるのは、かつて彼が「らっこの上着が来る」ことを自慢したこととの反動と見ている。
- (17) この鳥捕りの言葉には注目すべきであろう。ジョバンニとカムパネルラはもちろん、検札に來た車掌でさえおそらく初めて目にしたものらしいジョバンニの切符の意味を鳥捕りは知っており、その口ぶりや態度からはおそらく以前にもその切符を目にしたことがあることがうかがえる。ジョバンニとカムパネルラが「遠くから」來たことを「雑作なく」理解できるところも、鳥捕りの本質に関わる場面であろう。
- (18) 菅原千恵子『宮沢賢治の青春』宝島社、一九九六年。二五四頁。
- (19) 大明敦編著『心友 宮沢賢治と保阪嘉内』（山梨ふるさと文庫、二〇〇七年）一五四―一五七頁に全文を収録。
- (20) 『若葉の朝：我理想の村…』は原稿用紙二枚に書かれており、「四年二組 保坂嘉内」との記名があることから学校への提出物であったと思われる。内容は横井時敬の『模範町村』のダイジェストであるが、引用部分はほとんど略さずに書き写していることから、保阪嘉内は特にこの部分に強い感銘を受けたであろうことが推察される。
- (21) 保阪庸夫・小沢俊郎編『宮澤賢治 友への手紙』筑摩書房、一九六八年。二二二頁。
- (22) 保阪・小沢編、前掲書二〇八頁。
- (23) 大明、前掲書一四五頁。
- (24) 天沢退二郎「カムパネルラとし子」『別冊太陽』五〇号、一九八五年六月。
- (25) 大明、前掲書一七一―一七九頁に全文を収録。
- (26) この点については、保阪庸夫「風の又三郎の生れ在所を探して」『賢治研究』四二二号（一九八七年一月）に詳しい。
- (27) たとえば「森渡る風も、とどくと都ゆく汽車の窓べに寒し、浅春、」大屋根を ドドと揺らして 風すぎし静寂を 妻に酒注ぎている」などの作品があり、前者は大正六年の歌稿にある。保阪嘉内の濁点の打ち方には癖があり、「とどく」は「どどく」の意とみてよいであろう。
- (28) 入沢康夫「『銀河鉄道の夜』の発想について」（『宮澤賢治全集』別巻。筑摩書房、一九六九年）などによる。入沢氏が指摘するように特に『イギリス海岸』における水死や電信柱のモチーフは『銀河鉄道の夜』と通じている。また、詩「北いっぱいの星ぞらに」下書稿の中には『銀河鉄道の夜』の文中と同様の表現が見られるなど、大正一三年夏の日付を持つ詩には「薙露青」の他にも『銀河鉄道の夜』と通じるものがある。
- (29) 大明、前掲書四頁（口絵）及び二五頁。
- (30) 菅原千恵子、注19前掲書二六六頁。
- (31) 菊池武雄。注1に同じ。
- (32) 『銀河鉄道の夜』の第一―三次稿における題名は、記載部分が現存せず不明である。メモにあるように、当初は「銀河ステーション」という題名が付けられていたのかも知れない。このメモのほかに、『青木大学士の野宿』草稿や『文語詩五〇篇』下書稿の裏面などにも、この四作品を列記したメモがある。
- (33) 初期形のラストシーンでは、ジョバンニはブルカニロ博士から金貨を二枚もらう。これに対して後期形のラストシーンでは、ジョバンニはカムパネルラの父親から父親の帰還の報せを知る。これらはジョバンニの決意に対する褒美としての意味があるのではないか。
- (34) 天沢退二郎。注25に同じ。
- (35) 筆者は保阪嘉内の故郷・韋崎市や隣接する北杜市で、宮沢賢治がこの地を訪れて『銀河鉄道の夜』を書いたという類の話を何度か耳にした



ことがある。新たな伝説は既に生まれつつある。

〔参考資料〕

入沢康夫監修・解説『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』原稿のすべて』宮沢賢治  
記念館、一九九七年。

（だいまよう あつし 文学研究科国文学専攻修士課程修了）

（指導…三谷 憲正 教授）

二〇一〇年九月二十三日受理